

街路樹は苦しんでいる

毎朝ベランダに立つと、先ず太陽に、そして街路樹のユリノキや周辺のケヤキやイチヨウの木々に挨拶するようにしている。太陽は説明の必要のない特別の存在として承知しているが、樹木も「同じ地球の仲間であり酸素を供給してくれる大切な存在」として忘れぬために、感謝するように心がけているつもりだ。

その中の街路樹ユリノキに、僕は懸念していることがある。それは先ず、ユリノキの根元がとても窮屈そうで、太い幹となることを抑えられ、自らを支えるのにとっても辛いようだ。

その上、非情な鋏を入れられて、紅葉で着飾ることも無く、空に向かって気持ちよく枝を伸ばすことも許されないように去勢され、まるで百済観音の腕のようにくねくねとした容姿は見えて可哀そうだ。

他の広々とした公園の同じ仲間のユリノキたちは、のびのびと自由に幹と枝を伸ばして三〇歳は超えそうな背丈で、電線に邪魔だとして枝を断ち切られることもなく、初夏には高い梢の葉の間に隠れるように淡い黄緑色の花を咲かせる。それを見知っているので、気の毒でならない。

さらに云えば、ユリノキに限らず街路樹は二十四時間毎日、**騒音と排気ガス**にまみれているのだ。

街路樹も同じ生物である。われわれ人間が窺い知れない苦しみでもがいているはずだ。

街路樹で、このあり様だ。

そして一事が万事、

われわれ人間は自分たちの都合で、その結果、植物をはじめ自然を壊して来てしまった。

あまりに無知であったのだ。

過日、NHKで、「超進化論」という番組があった。

そこで、植物について映像で解き明かしている。

ほぼ動かない存在のため、自由勝手に手を加えてきたが、植物は痛みも感知し情報のやりとりも行って会話もし、大きなネットワークも築いて、バクテリアや昆虫たちとも共生しているという。

この知見が広まれば、人間の意識が変わって世界は大きく変革すると思った。

相手を思い遣ることが、「平和」の基本だと思うが、

人間のおごりに気付くことが、「地球環境保護」の基本ではないかと、断言したい。